

# のびのび通信 第61号

2011年1月

## 1月は、陶芸で今年の腕試し！

「のびのび」の活動には、季節行事として定着しているものがあります。4月のいちご狩り、10月の遠足、12月のペットボトルピザ…そして、1月は陶芸。ちょっとした事情で、変更になることもありますが、一年の中では、必ず実施する活動にしています。今回の陶芸も、その定着活動で、いつもと同じ場所(子育て支援センター)、いつもと同じ先生(竹籟薫の先生)、いつもと同じ白っぽい粘土と黒っぽい粘土で作ります。それも、今年で、5回目。なのに、同じ作品はできない!「次は、何つくろうかな〜」が成長につながっていくような気がします。



毎回、欠かせないスケジュール。今回は、ひとりひとりに紙に書いたものを渡しました。いつもの違いは……

『陶芸』をします。』という項目に、手順書的に

- ①先生からの説明があること
- ②粘土を順番で受け取ること
- ③ブルーシートの中で作ること

が入っています。今回は、5回目ということもあって、先生からは、今までと違う高度なテクニックを使って作る方法の説明がありました。しかも、20分も!



だけど、みんな真剣な眼差しで聞いています。なぜ、この説明を聞く必要があるのか伝われば、こんなにも集中できるんです。みんな素敵な作品、作りたいんです。



ここで見逃せないのが、やっぱり、ブルーシートの効果です。大人の発想は、汚れ防止ですが、子ども達にとっての意味合いはちょっと違うようです。作品づくりは、この中で行うことが約束ですが、反対に、終わった場合は、このブルーシートから出ます。だから、「ブルーシートから出る」ということは、「僕は(私は)、もう終わりです。(やりたくありません)」のサインなんです。だから、「時間があるから、まだ、やろう」とは強要しません。ブルーシートの外では、違う遊びをしながら、他の子の邪魔をせず、みんなが終わるのを待ちます。



だから、「陶芸=器」みたいな固定概念に囚われることなく、自由な発想の作品が誕生です。今回の最高傑作は、イカかもれません。焼きあがりを楽しみます。

【編集後記】 陶芸の活動では、初めてのとき、その日の活動は終了したのに、不服そうな顔をしていた子ども達の姿を思い出します。創作活動では、その日のうちに出来上がって、それを家に持って帰ります。でも、陶芸は、これから焼いていただくので、作品を持って帰ることができません。気持ちが、活動終了モードになっていない現れですね。でも、成長した子ども達は、焼きあがりまでの月日を楽しみに感じるようになっていきます。薫の先生も、回を重ねるごとにひとつの作品に集中する姿勢が感じられ、毎年、成長する姿が見られて嬉しいと。やっぱり、続けることこそが、この子たちの成長につながっていくんですね。

発行:発達障害児支援サークル「のびのび」